二〇一九年　冬、

札幌――ある日
どこかで

すぐそばにある二条市場のにぎわいがまぼろしかのように、ひとつ曲がればしんと静かな札幌の街角。

あなたは、アンティークショップの扉を開ける。

広々とした空間にところ狭しとインテリアや小物が置かれ、息を吸うとその隅々に冒険心のにおいが満ちているのを感じる。店内に並べられた木箱、瓶、トランクケースはどれも古びることでいっそう輝いているようだ。視線を落とすと、「二階、タイムトラベル専門書店」と書かれた小さな看板が目に入る。あなたはその店の存在に初めて気がついたような、あるいは随分昔から知っていたような気分に包まれながら木造の階段を上る。一段上るたびに鳴る靴音と、ぎし、ときしむ木の音がなんだか懐かしい。上りきると、一階とは打って変わってすっきりとした白い空間が広がっている。壁には時計がいくつも掛けられていて、そのどれもがばらばらの時間を指している。目が回りそうだ。それらを見ているとなんだか本当の時間がわからなくなってくるような、時間の流れと関係のない場所にきてしまったような心地さえしてくる。

タイムトラベル専門書店と銘打っているだけあって、SF小説とおぼしき本が机や棚の上に並べられている。一冊一冊手書

きのポップがつけられていて、誰かに馴れ馴れしく話しかけられているようだ。もう少し広い視野で捉え直すと、本と本の間を縫うように文房具が礼儀正しく整列しているのがわかる。なるほど、本だけではなく文房具や雑貨も売っている店なのだな。あなたはいつもこういう店に来ると、何から見て回ればいいのかわからなくなる。視線をすべらせ店内を見渡し、ここからかな、と直感であたりをつけてじっくり眺めはじめる。

最初はＳＦ小説ばかりなのかと思ったが、そうではなさそうな本もたくさんある。考古学、ノンフィクション、旅の本や絵本。これらもタイムトラベルに関係があるのだろうか。あなたは店内を歩き回り、初めて見るはずなのに懐かしい感じのする絵の前で立ち止まったり、表紙につられて本に手をのばしてみたりする。たまにはこんな妙な店でなにか買ってみるのも面白いかもしれない、とぼんやり思う。

二階に上がってきてすぐは、現代的な、こざっぱりした空間だなと感じたけれど、時間が経つにつれてその印象が少しずつ変化してくる。むき出しの梁や柱は見るからに古びていて、長年の歴史を感じさせる。ここがいつの時代なのかわからなくなりそうな、時間の無重力がそこにはある。あまりここに長く居

るともとの時間に戻れなくなりそうだ。そろそろ帰ろうとレジに商品を持っていくと、大学生にも三十代にも見える女性店員がじっとこちらを見つめ、話しかけてくる。

「……どこかでお会いしたことがありますか？」

多分、ない。いや、あるのだろうか。急な質問に驚きながら、記憶をたぐりよせる。店員の言う「どこかで」が、単純に自分の知っている時の流れのなかの一点というより、なにかもっと別の意味として響く。もしかしたら自分では気が付いていないだけで、今日という日をもう何度も繰り返しているとか。

特に手際がいいとは言えないが楽しそうに接客をする店員から商品を受け取り、店をあとにする。一週間後にもう一度来たいと思っても、もうそこにはタイムトラベル専門書店は存在しないのかもしれない。

あなたは、店でなんとなく気になって手にとった薄い冊子のページを開く。表紙には「fuwafuwa」と書いてある。

——季節が逆に流れ始めた。

# 二〇一九年　秋、

私たちは途方に暮れていた。タイムトラベル専門書店utouto、五回目の出現。第一

## 吉祥寺——犬とおまわりさん

fuwafuwa

回と同じ、井の頭公園の目の前にあるキチジョウジギャラリーでの開店だ。やったことがある場所だからって完全に油断していた。なんでも慣れてきた頃が危険だってよく言うのに、その、よくあるよくないパターンに陥ったのだ。もうだいたい手順がわかっているから、数時間あれば準備が完了するだろうと思い込んでいたが、本や商品をいくら並べても並べ終わらない。何かがおかしい。

「すごく、ものが増えてるんだよ」

いつも冷静ななかいさんが分析した。マスク姿でいかにも具合が悪そうだ。前日まで大型の台風が関東を直撃し、気圧の変化に弱いなかいさんを苦しめていた。

「どうしようかなあ」

こんどは比留川さんから、その日だけで通算十五回は聞いているであろう「どうしようかなあ」が出た。どうやら文房具の並べ方のことだけではないようだ。七年半勤

めた会社を辞めておよそ一年。ちょうどいま、個人的に、今後の身の振り方について思い悩んでいる時期らしい。一度その話を知ると、一回一回の「どうしようかなあ」がずっしりと重く聞こえる。私は、店長として、本屋をやろうと提案した言い出しっぺとして、弱っているふたりを見ながらかなり心配になっていた。調子に乗ってペースを上げすぎていたか。決して儲かっているとは言えないこの本屋が、楽しくなくなったら終わりなのだ。絶対に無理はして欲しくない。時間を止めてふたりの作業を手伝いたいけれど、自分の担当である本がまったく並べ終わりそうになかった。この年の春、初めてこの場所、キチジョウジギャラリーで開店したときに比べて、本の数も倍くらいになっている。なるべく表紙を見せるディスプレイがしたいというこだわりもあり、一冊一冊置けそうな場所を捻出しては並べていくという非効率なことを

やっていた。本当は「未来に行く棚」「ループもの特集」などやってみたい棚作りがたくさんあったけれど、時間内に並べ終わることに必死で細かいところまで手が回りそうになかった。

今年の春から本屋を始めて、最初は期間限定の移動本屋のスタイルだけれど、軌道に乗ったら固定店舗にするのもいいなあと憧れていた。しかし何度かいろんな場所で開催していくうち、毎回その場所とゆるやかにコラボレーションしたり影響を受けて変化したりすることが楽しくなってきた。またこのスタイルが、「時空の裂け目から突然現れる」というタイムトラベルコンセプトにぴったりでもあったから、固定店舗への憧れも薄れていった。それに、いつでもそこにあるお店ではなく、期間限定だからこそ来てくれているお客さんも多いのではないか。私たち、このまま神出鬼没でいこうか。これが最近の三人の総意になっていた。だけど、五回目。三人が同時に体力の限界を感じていた。毎回設営して毎回すぐ撤収するのって、あまりにもしんどくない？　私たちはここへきて初めて、至極当たり前のことに気がついた。最初の四回までは、ハイになっていて乗り切れたのかもしれない。

昼過ぎに絵本の出版社、ジュラ出版局の女性が本を届けに来てくれた。彼女は大小のダンボールがあちこちに転がる雑然とした店内を見ると、心配そうに「間に合うんですか？」と言った。「間に合わせます！」と力強く返したかったが、へろへろだったので「間に合うのかなあ……」と他人事のようにつぶやくことしかできなかった。

設営日のタイムリミットは十九時。夕方頃、今度は『東京暗渠学』『はじめての暗渠散歩』などの著者である本田創さんが本を届けに来てくれた。暗渠とは水路を地下に埋設したりふたをしたりしている場所だ。

暗渠の知識や味わい方を知って、かつてここは川だったのだなあと想像しながら歩くのがタイムトラベル的だと感じ、本田さんの本は第一回の開店からずっと店に並べている。暗渠がタイムトラベル的だという感覚はお客さんにもしっかり伝わったようで、入荷するたびにすぐ売り切れるので最近ではご本人に直接持ってきていただかなくてはならないほどになっていた。なかいさんのお母さんも暗渠にハマり、いまでは本田さんの街歩きワークショップに参加するまでになっている。なかいさんの母は、「かなりストイックに歩くのでワークショップの翌日は休息デーとして確保している」と言っていた。気合が入っている。

本田さんの第一声も、「これは、まだかなりかかりそうですね」だった。連続でふたりから心配されるなんて、客観的に見て相当まずい状態であるに違いない。なんだかんだ最終的にはなんとかなるだろうと考

えていた私たちは本格的に焦った。

「もう、明日の朝早く来てがんばろう。明日の自分たちに期待しよう」

退出時間が決まっているので、その日の作業はもう諦めるしかなかった。夜の井の頭公園を三人でとぼとぼ歩く。疲れているし、毎回設営と撤収を繰り返すこのスタイルにも少し限界を感じてしまった。数日や一週間といった短期間でスペースを借りると、固定店舗として家賃を支払うよりも一日あたりの家賃は当然割高になる。商売って難しい。一〇〇〇円の本が一冊売れて一五〇円から二〇〇円ほどの利益で、それが定価二〇〇円ほどのボールペンとなるとさらに少ない。自分たちの人件費を度外視して働いても、スペースの料金や仕入れなどの諸経費を払うのは大変なことだった。本屋業界が厳しいと言われているなかでやっていくにはビジネスモデルが欠如しているし、こんなに熱意を注いで、お客さん